

首相官邸で私が考えていたこと¹

齋藤 勁



齋藤勁氏プロフィール

1945年、横浜市生まれ。

横浜市議員を経て、参議院議員2期、衆議院議員1期を務める。2011年9月、野田内閣の発足とともに内閣官房副長官（政務）に就任し、同内閣の運営に携わった。

あらためて、こんにちは。駿河台大学にお招きいただきまして、心から感謝いたします。齋藤勁でございます。

昨年の末まで1年4カ月、首相官邸で仕事をしておりました。ただいま成田先生から官邸のビデオのご紹介がありましたが、あまり官邸のビデオを見たことがなかったので、「ああ、いいものだな」と感心しておりました。ただ建物の材質とか何か、ビデオではいろいろ説明がありましたが、当時は分刻みで動いていたものですから、あまりそういうことを感じないまま過ごしてきたわけでございます。

今日はこういう機会をいただきましたことに感謝いたしながら、お話しさせていただくのは、自分自身でも自分の仕事はどうだったのかなということ振り返るひとつのいい機会だと思います。

私は、今年の9月、先々月に法政大学のほうから連絡がございまして、

1 本稿は2013年11月12日に行われた駿河台大学比較法研究所講演会の講演記録である。

市ヶ谷の法政大学の大学院の客員教授を仰せつかりまして、毎週金曜日夜、大学院のほうに行きます。そこで、ゼミのようなそんな感じですけども、学生さんと向き合わせていただいております。今日はそのメンバーより数十倍といったらオーバーですけども、たくさんの方がいらっしゃいますので、そういう意味では、多くの学生さんを前にお話しする機会もなかなかないので、若干緊張しておりますけども。

私としては少しでも今日の時間の中で政治に関心を持っていただければと思いますけれども、より関心を持っていただき、1人の国民として、あるいは将来、地方政治にも国政にも関わる方もいるかもわかりませんし、あるいは公務員を目指す方もあるかもわかりませんし、あるいは民間で仕事をするなどいろいろなケースがあると思いますが、それぞれの立場で政治と向き合っていたいただきたいと思います。

この世の中は、政治とは無縁であるということはないわけでありまして、今も話がありましたように、日本の国は司法権と、立法権と行政権があるわけですけども、この三権分立という、その三権というのは、法律を作る国会であり、それをまたさまざまなルールが国民のためにいかに役立っているのかということも含めて検証する、あるいは訴訟も含めて司法という場があるわけです。また行政がいろいろと仕事をしていくということになります。

誰しも政治とは何らかの関わり合いを今も持っているし、これからも持ち続けるわけでありまして、ここから目をそらして生きていくということはあり得ないわけであって、ということになると、より身近であれば、身近であったほうがいいわけでありまして、たぶん先生方の気持ちも、官邸という建物もあるけれども、どんな仕事が行われているのだろうかということ、1年経とうとしているわけですけども、「1年たって、斎藤さん、忘れてないでしょう」ということだと思いますので、そういうふうな趣旨ではないかなと思ひまして、お話をさせていただきたいと思います。

井上先生から短かった野田政権というお話がありましたが、そのとおりでございます、民主党政権そのものが3年余ですから短かったので

すが、3人の総理大臣が誕生しました。鳩山さん、菅さん、そして野田さん。3人で日数を比較してもあまり意味がないのですが、野田政権が一番長かったということでございます。あまり意味がないので、これ以上申し上げません。

私自身のプロフィールはご紹介していただきましたので、これ以上繰り返すことはないと思いますが、若干お話の前に触れておいたほうがいいだろうと思います。

私はももとは横浜市役所の職員です。横浜市役所の職員を退職いたしまして、横浜市議員に2期当選をしまして。神奈川県に住んでおりまして、参議院神奈川県選挙区、全区区ですね、川崎市も小田原市も横浜市も、全区選挙区で当選し、参議院は任期が6年ありますが、6年後に再選されてちょうど国会議員活動10年のその時に、時の小泉純一郎総理大臣が郵政解散、これは皆さん方も学んだか、あるいは記憶にあると思いますが郵政解散をして、衆議院の総選挙がございました。2005年です。

この2005年の時に、私は参議院議員を自ら辞しまして、小泉さんの選挙区であります神奈川11区、三浦半島、横須賀市、三浦市、この神奈川11区で衆議院議員に立候補いたしました。斎藤さん、ご苦労さんでしたということで、小泉純一郎総理大臣からは圧倒的大差で私自身は敗北をしたわけです。

次の解散・総選挙というのが、民主党が政権交代をした時の2009年です。その時に、私は南関東比例ブロックというブロック選挙に出馬しました。神奈川県の場合は小選挙区が1区から18区まで、東京都も1区から20数区までありますけれども、その小選挙区で立候補をするということではなくて、神奈川県、千葉県、山梨県から成る南関東の比例ブロックで政党が名簿を提出するのですが、その比例の候補者になったわけです。この時は民主党が大勝して勝ったときですので、私は比例名簿の25、6番目だったと思いますけれども、小選挙区で民主党がほとんど勝ったおかげで、比例ブロックの中で私自身も当選をすることができまして、2009年に衆議院議員として再び国会のほうに戻ったわけでありまして。

2009年からスタートしましたのが鳩山政権です。鳩山政権はスタート

して1年足らずで残念なことに退陣をいたしまして、菅政権がスタートをいたしました。

この菅政権が2010年にスタートしたのですが、すぐ参議院議員選挙がありまして、残念ながら民主党は参議院での多数を失ってしまいました。鳩山政権の時は、衆参とも多数を握っていて、今は安倍政権が衆議院も参議院も多数を握っておりますが、鳩山政権の最初も衆議院と参議院で多数を握っていましたが、菅さんの就任後にありました夏の参議院選挙で民主党は参議院で多数を占めることができませんでした。

その後、菅さんからも周囲の方々からも要請がありまして、私は国会対策委員会をやりました。国会対策委員会というのは、通称国対というのですけども、コクタイというのは二つありまして、私自身は神奈川県のレストラン協会をやっているのですが、「国体」というと、今年では東京でやりますような国民体育大会。それが国会のほうへいくと「国対」で、国会対策のほうです。

国会対策というのは大変な仕事で、法案を通すためのいろいろな仕事をするのですが、そこをぜひ頼むということを言われまして、菅政権で参議院で過半数割れをした直後から務めさせていただきました。

その後2011年の「3.11」、東日本大震災という痛ましい自然災害が起きるわけですが、その時も国会対策の仕事をしていました。ちょうど私自身は、きょうのテーマの官邸の向かい側の国会議事堂の、衆議院の国会対策委員会の自分の部屋におりまして、菅総理大臣は参議院の決算委員会に出席していたときに、あの「3.11」の大きな揺れが起きました。国会内のシャンデリアが全部大揺れになって、いつか落ちるんじゃないかと、こういうような光景の中で、少し取まった中で参議院に飛んでいきまして、「総理、すぐ官邸に戻ってください」と申し上げたのですが、そんなことがつい昨日のように思い起こされます。

「3.11」以降は数日間、自宅にも戻らず、国会あるいは近所のホテルに宿泊をしていました。国会対策の仕事がいっぱいあったからです。そういうことが国会対策の仕事でした。

菅総理大臣が退陣をする時に、私自身も国会対策の仕事をやめるとい

うことでいたのですけども、1日たった後に、先ほど写真で紹介がありました野田佳彦総理大臣から携帯に電話がありまして、「斎藤さん、官邸に来てくれないだろうか」と言うことでした。「えっ」ということから始まって、私自身は国会対策で、精魂尽き果てたというのはオーバーですけれども、そんなような状態でしたので、「勘弁してほしい。なんで私が選ばれたんですか」と申し上げました。すると、今申し上げたように国会対策で大変な役割を果たしてもらった、体もつらいかもしれないけれども、国会が衆議院と参議院の多数派が違うといういわゆるねじれた状況で、国会対策が大切になっているということでした。官邸の仕事は、外国関係の仕事もありますし、あるいはさまざまな行政の仕事もありますけれども、大切なことは内閣は法案を作る、予算を作る、そしてそれを国会に提出をする。国会に提出した後、それを成立させていく、施行していく。これが内閣総理大臣の大きな仕事ですから、この官邸にいることも大切ですが、国会のこともますます大切になっている、ですからぜひ国会についての仕事をしてくださいということで、さんざん口説かれまして、お引き受けをしたということです。

結果的に野田政権が2次、3次の改造内閣を経て、昨年12月末まで、今の安倍政権に引き継ぎ、バトンタッチをするまで、私は官邸で仕事をさせて頂いた次第でございます。

時間が限られておりますから、どういう話をしたら皆さん方に政治により関心を持ってもらえるかと私自身も考えてきたのですが、ここ数年来の、私が官房副長官として官邸に入る前のことは省略させていただいた方がいいでしょう。鳩山政権とか、菅政権のときの話というのはたぶん4年生の方は大学生になってからのことだと思うのですね。前の郵政解散の時の話になりますと、高校生の時の話ではないかと思えます。それはともかく、私自身の、なぜ参議院を辞めて郵政解散のときに衆議院に出たか、そして郵政解散から鳩山政権でしたことなどは、省略をさせていただきたいと思えます。

ただ言えることは、小泉さんが郵政解散をした以降、翌年に今の安倍内閣総理大臣が誕生し、その後また1年足らずして福田康夫政権が誕生

し、更にその後麻生政権が誕生し、また民主党政権になっても、鳩山、菅、そして野田と、毎年のように総理大臣が代わってきました。昨年末の総選挙で安倍政権が再び誕生し、その後参議院議員選挙でようやく与党が参議院の多数を握ったことで政権が安定し、小泉さんから安倍さんになって以降の毎年の総理大臣の交代が、ここでようやく少し落ち着きが出てきたのではないかというのが、一般的な見方であるということだけは押さえていただければというふうに思います。

そこで官房副長官の仕事についてお話させていただきますが、官房副長官の仕事は、ものすごい仕事といってもいいでしょう。きょうはあらかじめお断りさせていただきたいのですが、こういう仕事もあります、こういう仕事もありますというのは、あいつ何か偉そうにしゃべっているのではないと思われるかもしれませんが、これは仕事の説明として言う話であって、これは勘弁して聞いてください。そうしないと今日の務めにもなりませんので、お許しをいただきたいと思います。

官邸を去る時に、私の副長官日程というのをもらってきました。事務方の秘書官が、斎藤副長官日程というのを、毎日前の晩に作ってくれます。前の晩、秘書官と打ち合わせして、「明日の日程は、こういう流れになっています」ということで説明を受け、それぞれの日程について「こうしよう、ああしよう」と打ち合わせをします。翌朝行きますと、訂正とか追加で変わっていて、①、②、③、④、⑤とどんどん日程の変更が入ってきて、最後の最終版というのを、どういう会議があったという記録のために、バインダーにして7、8センチの厚さになるのですが、それを自宅に貼って自分の日記みたいにしておりました。今はもう見ないですけども、今日は少しだけ持ってきました。1年前、2年前はどうだったのかというのをひもとく意味で、コピーしてお配りすればよかったのですが、お許しください。4枚持ってきましたね。

今日は11月12日ですね。私が9月に官邸に入って2カ月後の11月ですけども、11月12日は、2年前は土曜日になっておりますので、1日前の11月11日の金曜日の斎藤副長官日程というのを見てみましょう。

官邸に入りましたら、私の自宅は横浜なのですが、国会対策の時

は朝早く出て、夜は遅くなっても東海道線で自宅に帰っていたのですが、官邸ではそうはできなくて、何かあれば数分以内で官邸に行かなければならないということで、官邸の建物から歩いて7、8分の赤坂の議員宿舎に住みました。ただじゃないですよ。十数万円払っておりますから。

11月11日は、朝7時半にこの赤坂宿舎を出て、閣議が8時から始まりますので、閣議室に入りました。閣議があり、閣議の後に閣僚懇談会があり、8時半から国会対策役員会で、これは院内、国会の中に行きます。国会対策役員会終了後、院内で総務省の審議官と打ち合わせをします。

今度は官邸に戻りまして、10時から10時20分まで、オリンピックの東京誘致に関する関係副大臣や政務官との会議を、先程ビデオで映っていました2階の小ホールで行います。その後、今度は内閣府の副大臣と私の副長官室で打ち合わせがあり、続いて外務省の地球規模課題審議官の地球審のブリーフがあり、11時半からは危機管理審議官が来ます。国際組織犯罪等国際テロ対策推進本部の会議のため、これは私の部屋でやります。12時からはお昼を食べながら各府省連絡会議というのがあります。

従来の事務次官会議を廃止したのに、各府省連絡会議を置いたので、これを指して民主党政権が事務次官会議を復活したのではないかという報道が出ましたが、ここは違います。各府省連絡会議というのは、閣議があった日に全省庁の事務次官が来て、官房長官から閣議でこういうことがありましたということを伝える、協力してほしいということで。私はその会議では国会対策を中心に、国会で法案が今こういう状況です、各省庁とも協力してほしいという話をします。もちろんランチ・ミーティングみたいなものですけども。

その後、今度は予算編成実務者会議というのを行いました。私はその時は、次年度予算の総理枠という予算枠の官邸の責任者でありましたので、1時から4時まで官邸の真ん前にあります内閣府のほうの会議室で3時間やりました。その間ちょっと中断しまして、福岡県から県議団が陳情に来るといっているので、また官邸に戻り、4時に内閣情報官が私にレク

チャーに来るということで、国際・国内情勢についていろいろレクチャーを受けます。

内閣情報官という名称は、今日の新聞をご覧になってもいいと思うのですが、総理大臣の1日の動静の中に、1週間に何回か出てきます。さまざまな機密について官邸で集約をしている、そういう役割の人であります。

その後、今度は5時15分から西田国連大使があいさつに見えて、いろいろ西田さんと打ち合わせをして、その後5時半から、キッシンジャー元アメリカ国務長官が総理表敬をされるというので、私も同席をするので、事前にブリーフィングを受けました。これについては面白いエピソードがありますので、後ほどまた話をします。

その後、菅原原子力被災者生活支援チーム局長が見えて福島原発の關係のさまざまな被災の状況について打ち合わせをしております。その後、今度は夜、EPA閣僚委員会を2階の小ホールでやり、閣僚委員会が終わったら、総理の記者会見です。まず総理の記者会見の打ち合わせがあって、その後1階の記者会見場で、総理の記者会見に同席して、侍立(じりつ)をしております。

夜は、遅い時間ですけども、マスコミの論説委員の方々との懇談会というのがあります。これで私がひもといてきました一昨年の11月11日の金曜日の私のスケジュールがようやく終わるわけであります。

今度は去年を見てみましょう。1年たちました。1年たって、歴史的な日でした。11月14日です。11月14日というのは、当時の安倍自民党総裁と野田総理との国家基本政策委員会両院合同審査会での党首討論がありました。この日は朝早くから私は官邸に入りまして、大学の先生と会い、訴訟関係での打ち合わせ、アスベスト関係とかさまざまありました。国会対策の仕事もありました。先ほど言いました予算の実務者会議がありました。その予算実務者会議を中断して、クエスチョン・タイムの党首討論に行きました。

私は何かの予感がしていたのですが、まさかそこで野田総理大臣が衆議院解散の言葉を発するというのを、少しは予感のようなものもありま

したけれども、完全には予測していませんでした。すぐ後ろの衆議院の第1委員会室にいたのですけども、ある意味では歴史的な日でありました。

そこで野田総理が衆議院を解散するということを宣言したわけですが、それからの仕事が大変でした。それ以降は選挙モードになってきますから、予算の実務者会議や何やらをこれからどうしようかということで、この日、更に翌日とそれらを間に合わせるために行政の仕事の中で没頭していく形になりました。

くしくも、3日後の14日に私は政府専用機に総理と一緒に乗って、カンボジアのプノンペンで行われますASEAN首脳会議に向かっていました。往復の飛行機の中で野田総理とさまざまな話をしまして、私はもう引退するつもりだったのですが、総理がもう一度衆議院に立候補してほしいというようなことで、それも今度は地元の神奈川県ではなくて、中央線の沿線にあります山梨1区から出てくれということで、結局山梨1区から急きょ立候補することになったのですが、それもこのプノンペンへの往復の政府専用機の中で総理から言われたわけで、そのことをつい昨日のように思い出します。

私は、官邸の時はほとんど自宅には戻っていませんし、自宅の近隣の人には会えませんでしたけども、官邸勤めが終わって戻ってから、「斎藤さん、官房副長官の仕事って大変だね。いつも総理のそばにボディガードみたいに立っていたじゃないか」とか、「政府専用機でタラップで手を振っていたね」とか、あるいはこの前「大相撲で国技館で総理大臣賜杯を渡したじゃないか。あれは重さどのぐらいあるのよ」とか、そういう質問を受けるのです。「政府専用機というのはどういうふうになっているの」とか「総理大臣杯というのは何キロぐらいあるの」というのはよく聞かれるのですが、それらはよもやま話のようなもので、時間があつたらしますけれども、今日は先生方にご紹介いただいたように官邸ではどういう仕事をしていたのかというのが主ですので、そちらの少し硬派のほうの話なるべくさせたいというふうに思います。

官房副長官の仕事は総理大臣の意思によります。総理大臣が国民に約束したこと、その前の段階では政党の代表選挙で、自分は代表になった

らこれこれをやるということを意思表示します。そして、総選挙に勝ったときには今度は総理大臣ですから、総理大臣として与党第1党になりますから、その総理大臣としての意思を所信表明演説で表明します。どの内閣であっても、所信表明演説は国会で総理が発言するにあたって閣議決定をいたします。全部の閣僚はそれに従わなければいけません。閣僚が従うということは、行政がそれをサポートするという意味です。そのサポートを受けて何かをやるためには、具体的に法律を成立させなければなりません。そのためには立法府で国会議員一人一人を、また委員会で野党を説得し、成立させるというのが内閣と与党のまさに力なんです。もっとも法律を成立させることは、ねじれ国会になってからはなかなか難しいものがありました。

先ほど「3.11」の話をしました。私も「3.11」対策を進めるのに必要な法律を成立させるための国会対策の仕事をしていました。復興のためにこういう法律を作りたいということで、閣議案件として閣議決定をして、政府提出法案として国会に提出します。衆議院では私たちが多数ですけれども、参議院では野党が多数ですから、そのまま無傷では通りません。野党は修正をしましょうと言います。それで与野党の激突になって、審議時間が足りるとか足りないとか、もっと日数が欲しいとか、こういうふうに修正してほしいとか、いろいろなことが出てきますが、どんどん法律を成立させていかなければ、内閣の失点、エラーになりますし、国民から見ても、この内閣は力がないんだ、だから野党が新たに政権を担わなければダメだとなると政府・与党としては立場がなくなるので、野党の言いなりにはならないということで、国会が両者の攻防の場になっていくのです。

「3.11」からの復興のための法案も、そうした政府・与党の立場からは自分たちの立場を貫くことが必要なのですけれども、しかし必要だけでも、被災者のために面子を捨てても立法しなきゃならないということもあり、ねじれ国会の下で涙をのみました。パーフェクトな法案だと思って出しましたけれども、与野党協調ということで、野党の意見も聞いて、与野党共同で出し直すということで、政府提出法案ではなくて、

議員提出法案、議員立法ということで提出をいたしました。

議員提出法案というのは、法案の提出にあたって、衆議院は20人、参議院は10人の賛成が必要です。予算を伴う法案だと、衆議院は50人の賛成、参議院は20人の賛成が得られませんが提出できません。提出しても、過半数の同意がなければ成立しません。そういう苦勞がございました。

私の官邸の仕事はもちろん、官房長官の補佐であります。ねじれて以降は主として国会で法律を通すために動いてほしいということでございましたので、もっぱらそのための仕事をしていたわけです。

政府の法案を最終的に決めるのは閣議です。閣議の写真はあまり多くはありません。安倍内閣になって最初、テレビカメラが入ったのが1回ありましたが、普段は非公開です。閣僚応接室の真裏に閣議室というのがあります。閣議室には円形のテーブルがありまして、丸くなったところにすべての閣僚が座ります。私は大臣ではありませんから、官房長官のすぐ後ろのところに2人座れる机がありまして、衆議院議員の副長官と参議院議員の副長官が座ります。私は衆議院議員の副長官です。他にもう1つ端のほうに事務方の副長官、そして内閣法制局長官が座る席があります。

毎週火曜日と木曜日に閣議が開かれます。閣議では最初に官房長官が発言をします。「ただいまから閣議を行います。今日の閣議案件について官房副長官のほうから説明させます」ということで、私と参議院から来た副長官が交互に説明をします。今日の閣議案件はこうですと。法律案はこういうことですので閣議で承認してほしいということ全部私の方から朗読をします。朗読している最中にも決裁書類が大臣の間を回ります。閣議では全大臣が署名をします。前原誠司とか玄葉光一郎とか、それぞれ筆でサインをして、サインの下に華押という各人ごとの記号のようなものを書きます。そうやって閣議案件の書類が大臣の間をずっと回っていくわけです。

事前決済というものもあります。事前に閣僚からもらっている分です。最後に総理のところに行きます。総理の決裁が終わりますと、全て終わったことになります。それを法制局長官と事務方の副長官が確認して、決

裁が終わりましたということになります。

閣議の後に、今度は閣僚懇談会というのがあります。閣僚懇談会では閣議案件以外の大臣が発言していいわけですが、時間がオーバーするときもあります。それぞれ大臣が非常に多忙な時もありますから、短時間で終わることもあります。今、臨時国会をやっていますが、国会開会中は閣議は官邸の閣議室ではなく、院内、議事堂の真ん中にある部屋でやっています。開会中でなければ、先ほどのビデオの映像にありました官邸の閣議室でやっているわけです。

この閣議室は、閣僚と3人の副長官と内閣法制局長官しか入れないわけで、そういう制限のある場所は他にはありません。

以上、閣議のご案内をさせていただきました。

次に私の仕事としては、国会に行って答弁する場合もありました。あるいは法案を説明する時がありました。当然のことながら、議員として採決に加わるということもあります。

本会議では、総理答弁のチェックをします。その前に朝早くから仕事をしているということをご披露をしたいのですが、昨年の2月10日、メモしてきたんですけども、赤坂宿舎を6時に出まして、6時15分に総理勉強会。昔の官邸、今の公邸ですが、総理の住まいになっているところですが、国会の審議に総理が出る日は、そこで総理勉強会というのを行います。その日の予算委員会で議員がどういう質問をするか、それに対して総理としてどう答弁するかということについて、勉強会を行うのです。事務方が作ってきた膨大な書類に目を通しながら、議員がこういうことを質問します、こういうことを求めますということを説明を受けるわけです。よくこれは出来レースではないと言われるかもしれませんが、事務方による質問取りというのがあるので、質問取りがされていると、答弁資料は結構分厚くなります。質問取りがきちんとできている場合はですね。

しかし、簡単に何々についてとしか分からない場合もあります。TPPについてとか、日中関係についてとか、福島原発についてとかですね。何々について以外は分からないというときには、どうしようもないわけ

ですから、資料は参考資料を付けるだけ。それでも午前、午後の予算委員会の質問は、1日で10人ぐらいが立ちますから、準備のために1時間ぐらい朝に勉強会をやります。

6時15分から公邸で予算委員会勉強会をして、8時から閣議がありますので閣議。閣議が終わった後、その日は辞令交付式がありましたが、私自身は与党の国会対策委員会です。国会開会中は私の毎日の仕事になっていましたが、院内の国会対策委員会の部屋に行きました。国会対策委員会は与党であっても、野党であっても、毎日朝に会議を開きます。今日の委員会、今日の本会議がどうなっているか、法案が出ているけれども、どういうことになるだろうということについて、国会対策委員会の人たちがみんな集まりまして、打ち合わせをするのですが、そこに政府の代表として行って、国会対策委員会の皆さん方の意見を聞いて、法案がどういう審議状況になっているのかということを経日毎日チェックをし、あれば政府として注文をつけるということをやります。

次に私は、たぶんこの日、2月10日には政調幹部会に入っています。昨年の政調会長は前原元外務大臣でした。政調幹部会というのは、民主党政権のときには、政策調査会（政調）として、政府提出法案であっても党が事前にしっかり確認してから政府として閣議に提出して決定してほしいということで、ある意味では与党の事前チェックです。その場で法案の中身について政調幹部といろいろやり取りをする。これは週2回やりました。

このように官房副長官の仕事としては、衆議院の国会対策委員会に行って、それぞれの法案の委員会や本会議での運びはどうなっているのかを確認し、またその以前に、政府法案をどういうふうに出そうかということについて、政策調査会の人たちと話をすることがあります。以上は議員相手に行いますが、それ以前には行政の中で私は既にさまざまな省庁の官房長や次官の人たちと、私の副長官室で次の法案をどうするかということについて随時相談をしているというわけでありました。

私は衆議院議員ですが、それには関係なく、衆議院でも参議院でも呼ばれれば私自身が、答弁に立つということもありました。衆議院と参議

院の予算委員会にも出ました。いろいろな委員会にも出ました。私自身が指名される場合もありますけれども、官房長官を補佐して、官房長官が出られない場合は官房長官に代わって私が答弁に立つということもありました。

もう一つには、議院運営委員会への出席というのもございます。国会には与党、野党がおり、国会対策の仕事があるというお話をしましたが、正規の機関で議院運営委員会というのがあります。この議院運営委員会ですべて確認をされませんと、法案は各委員会あるいは本会議に、付託、審査に対する付託というのできません。官房副長官の仕事として、衆議院議員の私は衆議院の議院運営委員会に行く、参議院の副長官は参議院の議院運営委員会に行って、今国会の法案について全部説明をするのです。追加で提出する法案も説明をします。また、外務大臣だけでなく、どの閣僚が海外に出張する場合も、国会の会期中は国会の了解なしに海外に行くことはできません。国会から、「行っていいよ」ということがなければ行けないのです。

一般、アントニオ猪木さんが国会開会中に北朝鮮に行って問題になりました。あれは事前に国会対策委員会や議院運営委員会に、「これこれこういうことで行くから行かせてください」と申請して、「いいですよ」という了解を取らないで北朝鮮に行って帰ってきたからペナルティーを受けることになったのです。

同じように閣僚も国会開会中であれば、この議院運営委員会から了解を取って出かけなければならないという仕組みになっています。それだけ国会開会中というのは、国会が最優先であるということです。政府としても法律を成立させたいわけですから、国会のことを最重要視するというのであります。

先ほど司法についてもちょっと触れましたが、官邸と司法とは直接は関係ありません。いろいろ訴訟に関係する対策を政府としてする場合というのはありますけれども、司法は独立していますから、司法と直接やりとりをするというのはありません。しかし、宮内庁とは非常に密接な関係がございます。

宮内庁との関係で言いますと、皇室行事に関しましては原則として、「予定があるから」ということで辞退してはならないわけです。閣僚、官邸にいる人間は義務出席という、公務に支障がない限り参加をしなければなりません。新年の宮中参賀があり、年末には12月23日は天皇誕生日であり、あるいは皇后誕生日があり、外国の方々为国賓として来られましたら、宮中で歓迎の集いがありますので、それにも参加をするということもあります。

その他さまざまな皇室に関係する行事に参加することがありまして、そのたびにこのような私服でいい場合と、モーニングを着なければならぬ場合があり、私自身はモーニングがなかったので、モーニングを買えばよかったのかも知れませんが、貸衣装屋さんにはずいぶんお金を出すことになりました。余計な話ですが。

ブータン国王ご夫妻が新婚旅行を兼ねて日本に来られた時ですが、国賓が来られた時は、参賀の広場に行かれた方もいらっしゃるかも知れませんが、皇室の方々も宮殿のガラス張りのところで手を振られますね。その手前が大きな広場です。そこに外国の国賓の方々も車で来られて、両陛下がお迎えになられるわけです。両陛下と一緒に自衛隊員の儀仗兵がお迎えをして、両国の国歌が演奏される中をゆっくりお通りになるところに、野田総理大臣以下閣僚や私たち全員が立ちましてお迎えをするのです。そういうのが国賓が来られたときであります。こういうこともございました。

昨年には、三笠宮裕仁親王殿下が亡くなりまして、ご弔問にあるいはお通夜に行く、こういうこともございまして、一般的に私たちの普通の庶民の葬儀と、皇室の方のご葬儀が本当に違うのだなというのも、初体験ですけども、させてもらいました。

不謹慎になりますので、このお通夜の模様とか、ご葬儀の模様については申し上げるつもりはございません。

野田内閣が手掛けたことで、残念ながら、中間報告で終わったのですが、皇室制度に関するヒアリングというものも何回か行いました。今の皇室・皇族は、いわゆる男系、そして世襲ということになるわけです。

皇太子殿下、秋篠宮殿下がいらっしゃるしまして、秋篠宮殿下には男のお子さんがいらっしゃいます。しかし、三笠宮さまのご系統にしても本当はさまざまところに男子のお子さんがいらっしゃるとうよろしいのですが、実際にはいらっしゃらないということで、このような状況で皇室は将来的にどうなるのか、あるいはどうあるべきなのかということなのです。皇位継承の話は別にしましても、女性皇族を中心にして皇室をどういうふうにしていくかということについて、宮内庁のほうから野田内閣総理大臣のほうに依頼がありまして、この皇室制度に関するヒアリングというのも行いました。大変マスコミから注目を受けた課題でして、私自信もいろいろな皇室の歴史を知る機会になりましたけれども、最終的に中間報告で終わらざるを得ませんでした。こういう宮内庁関係の仕事もございます。

世界中の国々からの来客がございます。総理への訪問もあります。アメリカからキッシンジャー元国務長官が来られた時、さっきちょっと触れましたが、内容はお話ししませんでしたので、ここでお話しておきます。キッシンジャーさんはフジテレビの会長さんと一緒に見えまして、翌々日に伊豆のほうで講演をされるということで寄られました。総理と面談をとということでしたが、総理からはお会いできるかどうか分からないということでした。これは一昨年(2014年)の11月11日のことで、その日の日程を見ているのですが、たぶんこの日総理は、社会保障と税の一体改革、予算関係、被災地の関係などで多忙に多忙を重ねていたのだと思います。「5時半から5時45分、キッシンジャー元米国国務長官総理表敬訪問 15分間同席」になっています。

前もって「もしかするとお会いできないかも知れませんが」とお話していたのですが、実際不可能になりまして、それまで私は長島昭久補佐官と一緒に、フジテレビの日枝さんとキッシンジャーさんのお相手をしていました。キッシンジャーさんはニコニコしていました。私にとってキッシンジャーさんなどというのは、歴史上の人物です。そのキッシンジャーさんと自分が今こうして官邸にいて、お話しできているのは本当にありがたい、というような話をしていました。

国際情勢のいろいろな話もしながら、「もう少しお待ちいただけますか」と申し上げる。そこまではまだキッシンジャーさんはニコニコしている。また秘書官から連絡がありまして、私のところにメモが入りまして、「副長官、総理はどうしても無理です」と。それで「大変申し訳ありません」と言ったところ、顔色はパッと変わりました。ものすごい顔色になりまして。あの日は官邸の3階の左側の部屋で私が対応したのですが、玄関に出て行く間は一言も語らずに、そしてフジテレビの日枝さんのほうは「斎藤先生、まずいや、副長官まずいや。キッシンジャーさん、怒っちゃったよ」って言うていました。「怒っちゃったよ」というてもしょうがないですね。それでもものすごい形相で帰り、その後また電話がかかってきて、「何とか時間を取ってほしい」と。また総理のところに行きまして、「どうしてもしょうがないので、5分間。何分でもいいですから」と申し上げて。「そうですか」と言うていました。

そして宿舎からまた戻ってもらってお会いしました。また顔面ニコニコになられて、「いや、いや、いや」と。私は総理の隣で伺いました。今思い浮かぶのは、最初楽しく会話をしていた1つ目のシーン。「総理は来れません」という2つ目のシーン。そして帰る時のあのムスツとした顔の3つ目のシーンね。さらに今度総理に戻ってもらって会っていただいて、総理とやり取りしていただいたシーンです。キッシンジャーさんをべつに悪く言っているわけではないのですけども、そういうこともありましたということです。

時間をだいぶ超過していますので、あと7、8分でやめます。

外国の話が出ましたが、私は政府専用機に乗りまして何回も行きました。政府専用機に乗る以外も、韓国、プノンペン等には単独で行っております。

この機会ですから政府専用機のお話ししますが、政府専用機がどうなっているか。あれは大型ジャンボで、今はもう現役の飛行機でなくなっています。民間の航空会社では、もう大型ジャンボは飛んでいませんから。

タラップを上がって、総理がいつも手を振っているところの後に機長さんが控えています。「ようこそご搭乗いただきました」とご挨拶があ

ります。飛行機のはなの右側のところが全部総理の部屋です。すぐ左側に執務するデスクがあります。こちら側に2人、向こう側に2人座れる応接があって、食事ができる所があります。その向こう側にベッドが2つあります。総理と総理夫人が使います。あるいは天皇、皇后両陛下が使われる。この飛行機は総理大臣と、その他は天皇皇后両陛下しか使えません。そういう飛行機です。

その裏に洗面所があって、その次に私が同乗する場合は私が使う個室があります。最初に総理と行ったときは1時間ちょっとで行きましたので、使いませんでしたけども、長距離の時には使用するベッドがあって、私が執務できる場所、食事ができる場所と広い部屋があって。洗面所は総理と共用になります。私のスペースに続けて会議室があります。さらにその後には、小さい部屋が1つありまして、私の他に大臣が同乗する場合は申し上げたスペースは大臣に提供しますので、私は後ろへ下がります。その後に秘書官とかがズラッと並んで、さらに一番後ろのほうにマスコミの人たちが座る座席があります。

飛行機の2階には操縦室がありまして、操縦室の後に乗務員の人たちがいます。全て自衛隊員です。航空自衛隊の隊員の方たちで、その人たちが食事を持ってきたり、機内サービスをしてくれます。これが政府専用機です。

大相撲で総理大臣賜杯の贈呈をしましたので、総理大臣賜杯についても言っておきましょう。重さは40キロあります。

まとめに入ります。野田政権として施政方針演説と所信表明演説をやりました。社会保障と税の一体改革、これは大変苦渋の決断によってやった政策です。消費税の引き上げは、選挙のマニフェストには当初あがっておりませんでした。このことに関しましては、野田政権後の総選挙と参議院選挙で大変厳しい審判を受けました。しかし、野田内閣総理大臣としては、将来の子や孫の世代に向けて安心できる社会保障制度をつくるためにも、負担をお願いしなければならないと考えていました。ひとりの人にかかる社会保障の費用を何人で負担するかということについて、総理はかつて胴上げ型だった、あるいは騎馬戦型だったのが、肩車型に

なると説明されていました。この政策は、お年寄りが増え、支える世代が減る少子高齢化の中で、一日も早く安心できる社会保障制度をつくるために、またそれに対する負担をどうするかということで、マニフェストになくとも提起したものです。社会保障と税の一体改革というのはそういうものでありました。これを成し遂げようというのが野田内閣のまさに最大の課題であり、それを実行したのです。

もう一つは、良好な日米関係をつくっていききたい。そしてアジアとも近隣関係をしっかりしていききたいということでありました。更にもう一つは、福島原発のみならず被災地に対する1日も早い復旧・復興でありました。福島の再生なくして、日本の再生なしということで、やっけてまいりました。

私もこうした課題の実現を目指してひたすら歩んでまいりました。ぜひ皆さん方には、冒頭でも申しましたが、政治にご関心を持っていただく意味で、雑ばくな話だったかも知れませんが、お役に立てればと思います。せっかく成田先生も本学にいらっしゃいます。成田先生は、野田内閣の時の内閣官房参与であり、また細川政権の時は、1票による政権交代を実現するための政治改革に携わられました。選挙制度改革によって、1票はとても重いものになりました。その1票の重みにどれだけ政治家が応えているかどうかということがあります。選挙によって多数を握った政治勢力が政権を担い、政権によって何をしようとしているかということについても深く考えていただければというふうに思います。

国の計は百年の計ということだと思います。今日起きたこと、明日起きることによって、会社というのは四半期ごとに業績を判断したりして、場合によっては、会社の社長、会長の首も飛んでいくということになりますけれども、私は政治というのは、百年の計で判断するものだと思います。先ほど税と社会保障の一体改革について申し上げましたが、中間層の方たち、働く人たちが安心して暮らせるように、しっかりとした子ども手当あるいは高校授業料無償化によって安心社会をつくりたい。私は民主党政権というのは百年の計を目指した政党だったというふうに考

えています。しかしながら、最初からマニフェストも含めまして、いろいろ不十分な点もある政党であったなというふうに思います。

何を言いたいか。民主党があるとかないではなく、民主主義です。民主政治。この民主主義というのを、私たちは1945年、私が生まれた以降、戦争に敗れたことから、この平和、基本的人権、主権在民という憲法を打ち出して、今日まで来ました。私たち一人一人がこの民主主義というのをいつまでも貫き通す、標榜し続けていく。そこに参加をしていくというのが、今の憲法下の中で役目ではないかなというふうに思います。今日聞いていただいたことで、私の話をそんなことに結び付けていただければありがたいというように思いながら、与えていただきました時間を4分ほど超過しましたので、ここまでにさせていただきます。これもしゃべろう、あれもしゃべろうといろいろ用意してきたのですが、他はすべて省略をさせていただきます、お粗末さまでしたということで閉じさせていただきますというふうに思います。残る時間、もしご質問があれば答えさせていただきます。

ありがとうございました。

(拍手)

司会：斎藤先生、どうもありがとうございました。

せっかくの機会ですので、質問があれば二、三お受けしたいと思います。どなたでも手を挙げて、質問してください。

お願いします。

質問1：政府専用機ですが、たぶん大型機、中型機になると思うのですが、収容スペースって足りると思います？

斎藤：私は官邸にいる時に、次期専用機をどうするかというので、まだ予算要求まではいかなかったのですが、どういう組み立てにするかというので議論をしまして、その時から民主党政権のための政府専用機ではなくて、皇室、両陛下も乗られるという観点で私自身、幾つか考え方を出しました。

1つは買うのか、買わないのか。現在は買って政府が所有していて、メンテナンスは千歳の自衛隊でやっています。ご存じかと思う

のですけども。それに対して、「リース方式があるじゃないか」という意見があります。リース方式をやったほうが、秘密の部分についてはしっかり防護するとして、それで国民の負担が少なくなれば、買うよりもリース方式がいいのではないかと。買うのか、リースにするのかという選択肢をどうするか、ということがまずあります。

もう1つは複数機、そして千歳ではなくて、羽田とか、成田にも置けるような、そういう態勢にしたほうがいいのではないかと。今も複数機なんです。総理が行くときには、カラの飛行機が一緒に行くのですよ。カラの飛行機が行く意味は、乗っている飛行機にもシアクシデントがあったら乗り換えてもらう、ということです。帰ってこないと困っちゃうからということで、複数機今あるのですけども、さらにもう1機ということですけども、これだけグローバル化した国際社会ですから、閣僚が行く場合、外務大臣が行く場合があるということで、総理だけではない、総理と両陛下が乗る場合以外のことも考えて複数機のリースにするか、買うのかということです。また閣僚用は中型機でもいいのではないかとということまで、そういう選択肢をいつか私が用意して協議に入ろうというぐらいのところまでいったのです。今はまだそんなに固まっていないと思います。少し動いているかな。これ以上は、今は分かりません。

質問1：ありがとうございます。

司会：どうもありがとうございました。ほかにいかがですか。成田先生。

質問2：お話の中にもありましたけども、斎藤副長官は外交関係の担当ということで、総理の外遊のときにはいつもご一緒されたわけですが、世界のリーダーですね、アメリカはバラク・オバマ大統領、韓国は李明博大統領、中国は胡錦濤主席でしたが、そういう世界のリーダーたちと会われたときの印象を、一言ずつで結構ですから教えていただきたいと思います。

斎藤：オバマ大統領とはカンボジアの東南アジア諸国連合（ASEAN）でお会いしたときに握手してもらいました。真ん前にクリントンさんと一緒にいたんですけども、座った途端にiPadを操作し始めまして、

大統領もそういうことやっているのだなと思いました。翌年にワシントンに行きまして、ホワイトハウスの大統領執務室でお話をしました。印象として、政治家であるけど、極めて有能な経営者というのでしょうか、実務家というんでしょうか、実利者、そういう印象があったですね。野田さんに関しては非常に親近感を持っていたという印象があります。

プーチンさんとはアジア太平洋経済協力会議（APEC）のときにお会いしております。電話会談では、私は総理が、各国首脳と電話会談をするときには、総理の部屋に行って、電話会談で同室をしましたが、最初のプーチンさんとの電話会談のときもいました。総理には、既に外務省と全部打ち合わせした後ですけども、「総理、プーチンさんにこういうお話をされたらどうでしょうか」ということで、私も考えるところをお話しさせていただいたのですが、プーチンさんは、あの方も意味では、オバマさんと共通するかもしれませんが、実利的な方ですね。頭がいいですね。

ウラジオストックのAPECの時に、総理にもプーチンさんに協力してもらったんですが、ウラジオストックに行くからですよ、事前にちょっと話があったのですが、ウラジオストックに行くから、あそこに大きな1万人以上の大学ができたんですけども、その学生さんを中心にAPEC会場でいろいろボランティアをやっていただいた。したら何百人もいる学生さんを日本に連れて行きたいのだと。船に乗せてから、何百人のビザを出してくれということです。

昔あった杉原千畝とユダヤ人の話ではないですけど、法務省も含めて外務省も含めて大変なのですね。それをやってくれということで、「それはやったほうがいいだろう」ということになったのですが、「外務省、できるのか」と言ったら、「うーん」と言っているんです。「やれるのか、やれないのか」と言ったら、「やります」と。それはプーチンさんの学生に対するサービスですよ。日本に対して、野田政権のほうが本当にやってくれるのか、やってくれないか、スピード感を持ってやってくれるかどうかということで、それはOKしましたけど

も、それこそさっきのキッシンジャーさんのニコニコじゃないですけども、ニコニコして、大きな船で横浜港に入って、スカイツリーとかに行っただけですけども。非常に現実主義者っていうのでしょうかね。ロシアの大統領が極東の大学に来て、ボランティアの学生のためにということをして直接日本の総理大臣に言うというのは珍しいと思いました。

胡錦濤さんは2回ほど、日中韓と日中の首脳会談でお会いしましたが、表情はテレビで見ても崩さない方です。最後にやはり厳しい印象をもったのは、APECの時に胡錦濤さんとはいろいろありましたけど、握手はできたんですけども、直前の四川省の地震について野田総理がお見舞いを申し上げたのですけれども、その時の様子について総理が「いや、斎藤さん、すごかった」。私はちょうどそこにいなかったのですが、「何ですか」とお聞きしたら、胡錦濤さんが、「僕は地震のお見舞いを言ったんだけど、それどころじゃなくて、失閣でダーツときた」ということでありました。

温家宝首相は、私は胡錦濤さんよりもお話をしたことがありまして、私もミーハー的なところがありますので、李明博大統領にも昼食会でサインしてもらったり、温家宝首相にも昼食会のメニューにサインしてもらって、「これは本当の私自身の家宝です」なんて言ったのですけども。

そのほかは、印象的なのはカンボジアです。フン・センさんはこの前首相に再選されましたけれども、私はASEANの首脳会談をプノンペンでやるというので、総理と話して単独でプノンペンに行きまして、2時間ほどフン・センさんとお話をしました。この方は、中曽根さん以降の総理大臣の名前を全部言えます。それだけ日本との関係が深い人です。

世界にはさまざまな指導者がいます。政治的立場は別にして、日本も安倍さんにいい政治をやってもらって、1年総理でなく落ち着いてもらいたいと思います。嫌な政治、国民が駄目だと言う政治なら、ノーと言えればいい。そんなことです。

司会：どうもありがとうございました。時間も来てしまったようですの

で。斎藤先生、きょうはどうもありがとうございました。貴重なお話を頂きましてありがとうございました。

(拍手)

比較法研究所の公開講演会をこれで終了いたします。どうもご苦労さまでした。

(編集責任 成田憲彦)